

福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】から

主宰論説25

仙人と聖人と凡人

人は、その道での熟練度で、色々な分類がされるようである。まず「名人」という言い方があり、その道の熟練度が最高レベル近くまで行った人に贈られる称号である。また、生前／生後を問わず、世のため、人のために、世界人類に多大な貢献をした人に対して、「偉人」という言い方がされることもある。また、一風変わった特別の才能を発揮する人には、「変人・奇人」という言い方がされることもある。他方、そこまでいかなくても、付き合ってみて、『するめ味』のように味わい深く、興味が尽きない人には、「面白人」という言い方もあるようである。ただ、他人の事は、わかっても、ともすれば、自分のことは、わからないことも多いから、勝手に名乗るわけにもいかないようである。

ここで、「仙人と聖人と凡人」という面白い分類方式を、考えて見るのも楽しい。「仙人」は、「霞（かすみ）を食って生きる浮世離れした人」を指すようで、「琢（たく）まずして、生来の非凡の才能を発揮する人」と言える。また、「艱難辛苦を乗り越えて精進した暁に何か後光を感じさせるような人」は、「聖人」と言うようだ。昔の中国の盛唐時代に、漢詩の数多い詩人の中で、李白が、『詩仙』、杜甫が、『詩聖』と称されたのは、故あることかもしれない。「凡人」は、「迷い悩みながらおぞましく生き、なかなか悟りに至らない人」で、世間一般の大多数であると思われる。生きる上で、どのような人を目指し、また、どのような人になるかは、難しいところかもしれない。

令和3年7月28日

自由俳句：

咲き乱れる花もいろいろ夕景色

研究手法・課題と生き方・歩んだ道の連動現象

長年大波小波に揺れ揺られながら生き、研究もやってきて、ふと気付くことがある。研究テーマは、その時代の時流、ファッションに対応し、所属組織の哲学や社会的要請に応じて決まることも多い。また、人は、思った通りの道を一筋に貫き通すことは、必ずしもできず、色々な道を迂回しながら生きることも多いようだ。ただ、頭に描いていた夢や希望は、かなり時間がたって振り返ってみると、研究テーマ、研究手法などに反映されているように思う。また、逆に、研究手法や研究課題が、生き方・歩んだ道と重なることもあるようである。寿命予測や劣化解析も、時とともに、やり方も変わってゆくようである。「仕事・趣味と生き方の連動」ということを考えて見ると、面白いようである。

令和3年7月28日

自由短歌：

大空のあなたに飛び立つ白鷺はどこを目指して行くのやら